

地域活動の鍵は情報！トル・ダス・ツナグ



令和7年3月12日（水） 午後6時～8時30分 於セッション杉並第8・9・10集会室

- 【目的】 地域活動に必要な情報リテラシー（情報の取得、解析、応用、共有）をテーマとし、社会教育士等が地域活動をより良いものにする力量形成を図ります。
- 【内容】 第1部 ゲームを通して地域活動に必要な情報の大切さを体感します。
第2部 地域活動実践者のパネルディスカッションを聴き、自身の活動に活かします。
- 【参加者数】 26人（主に地域活動をこれから始めようとしている方、地域で何か活動をしている方）
- 【講座の流れ】 講師の話を聴くのための講座ではなく、まず、情報の「トル・ダス・ツナグ」がいかに大切かを体感できるゲームをやってみて、ゲームでの気づきをもとに、地域活動実践者のトークを聴く、という構成にしました。

第1部 情報体感ゲーム

- 情報体感ゲームは、約30分間のグループ対抗戦です。
- ゲームの目的は知らされますが、与えられるのはわずかな材料や情報のみです。グループごとに与えられた材料は異なっているのに目的は同じ、という不思議な状況下に置かれます。
- ゲームの参加者は、まずグループのメンバーで相談して行動しますが、グループ内でのみ相談しているより有効な方法に気づいていきます。適宜発せられる進行役からの情報を得ること、他のグループの状況を探ったり、自分のグループの強みを宣伝したりして情報のやりとりをすることによって目的が達成されることがわかった、という感想が多くありました。



ゲームの様子

ゲームをやってみての感想

- 自分自身は、遅れて来て途中から参加したため、自分の役割がわからず、何をしたいのかもわからなかった。同じグループの人たちに言われるがままに動いた。この状況は、町会に途中から関わって、とりあえず**前からいる人たちに指示されてやっているのに似ている**と思った。
- まず、自分たちのグループに支給されたものが何なのかを理解するところから始め、次に周りを見て、自分たちの持っているものの価値を知るようにした。
あまり**考えすぎずにとにかく行動したことが良かった**。
- 最初は何をすればよいのかわからなかったが、他のグループとの**コミュニケーションや交渉などによって情報を得たことで徐々にわかり**、グループの仲間と作戦を立てて行動できた。
- 「このゲームは何が目的なのか？」ともやややした。情報は常に変わるし、**欲しい情報は、自分から取りに行かなければダメだ**と実感したので、もっと質問すればよかったと思った。

第2部 パネルディスカッション「実践！トル・ダス・ツナグ」

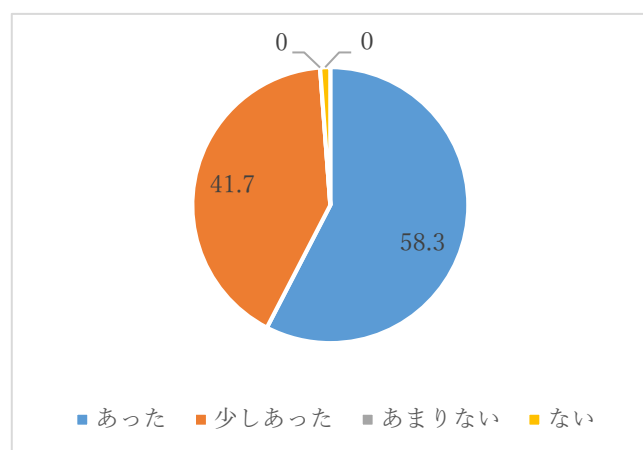
ファシリテーター：水野二千翔さん（高円寺工房）

パネリスト	朝枝晴美さん 「すぎなみ協働プラザ」 運営責任者	伊藤益子さん 「こどもと笑顔 with」 代表	久我凜太郎さん 「駄可笑屋敷プロジェクト」 代表理事
私はこうやって 情報を トル ！	・私は紙のチラシが大好き。 ・集めすぎて收拾がつかないことも・・・ ・その情報がなぜ必要か、いつまで必要かを考えてピックアップしないと！	・私は自転車と Facebook。 ・杉並区内を自転車で走り回って情報を集めている。 ・アポなし電話もよくする。	・「しれっと」がキーワード。 ・しれっと町会に参加したり、飲み会に参加したりする。 ・失敗もあるが、めげない。
私はこうやって 情報を ダス ！	・協働プラザは、登録団体の情報はもちろん、登録していない団体の活動情報も流している。 ・SNS や HP は、これといったトピックがなくても、常に新鮮さが大事。	・私は自転車でどこへでも行き、私のやりたいことを伝えている。 ・直接会って誘えば、イベントや集まりに来てくれる。	・SNS や公式 LINE を使うときは、情報にストーリー性をもたせることが大切。 ・地域活動は明確な成果を求められるわけではないから、プロセスを楽しむことも大事！

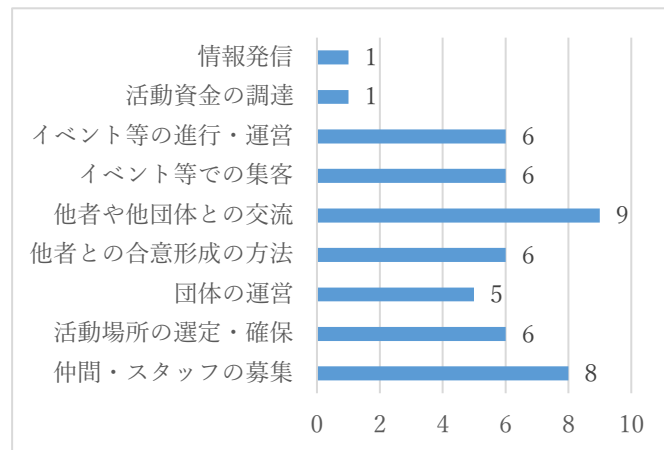
三者三様の強みを生かした実践に、参加者は真剣に耳を傾け、ご自身にあてはめて考えていました。

【参加者アンケートより】

①ご自分の活動に役立つ部分はありましたか？



②今後学びたいこと、身に付けたいことを教えてください。



【こんなプロセスで講座をつくりました！】

この講座は、「学びの場を一緒につくりたい」と集まった**社会教育士や地域活動をしている方 16 名と一緒に**作りました。さらに、**企画協力者として、杉並区内で活躍されている特定非営利活動法人チューニング・フォー・ザ・フューチャー（TFF）の方々**をお迎えしました。

TFF の方から「情報」についてのレクチャーを聴いたり、運営方法を話し合ったりするミーティングを 3 回行いました。さまざまな議論を経て、プログラムデザインや役割分担を決定して当日を迎えました。講座の進行やパネルディスカッションも、ミーティングに参加したメンバーが担いました。